

Title	表現活動における障害と社会——障害者が参加する音楽団体を事例として
Author(s)	正井, 佐知
Citation	
Issue Date	
Text Version	none
URL	http://hdl.handle.net/11094/76340
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

論文内容の要旨

氏名 (正井 佐知)

論文題名

表現活動における障害と社会
——障害者が参加する音楽団体を事例として

論文内容の要旨

本論文は、障害と社会の関係性について障害のあるメンバーが参加する音楽団体の事例から明らかにすることを目的としている。音楽集団がどのように社会と関わるか、そして、障害のあるメンバーとその周囲のメンバーがどのように集団に参加するかを明らかにした上で、障害と社会の関係について考察を行った。論文は、7章で構成されている。第1章では、先行研究の整理を行った。第2章では、音楽団体の社会とのかかわり方について明らかにした。第3章から第6章までは、音楽団体の練習場面に着目し、障害のあるメンバーの参加を確保する実践的な方法について明らかにした。第3章では合奏の事後評価、第4章では合奏の事前準備、第5章・第6章では通常排除と関連付けられる行為・現象の対処について扱った。第7章では、音楽団体の運営という観点から多様なメンバーの参加の方法について考察した。各章の要旨は次の通りである。

第1章では、障害者による芸術全般に関する先行研究の整理と本研究の位置づけ、分析枠組みを明確にした。第2章では、音楽団体の団体性に焦点を当て、その社会とのかかわりや、社会的な位置づけをどのように語るかを分析し、団体の社会への関わり方を、オーケストラ、和楽器バンド、ロックバンド3団体の代表へのインタビューから明らかにした。3団体ともく「障害のない人」の参加が想定されている世界と、「障害のある人」が参加しやすい世界を比較して異なる世界として提示していた。ただし、その提示の仕方は、それぞれの団体ごとに異なっていた。第3章では、障害者の参加のしやすさと関連があるとされる、演奏した音楽の事後評価についてオーケストラ、ロックバンド、即興音楽団体という3つの団体の練習場面から明らかにした。先行研究では、障害と音楽ジャンルは関連付けられて議論が行われていた。しかし、本研究の事例では合奏の事後評価には、きめ細かに参加と音楽性を両立させる特定のジャンルの方法があることが明らかとなった。第4章では、合奏の事前準備のうち楽譜トラブルの場面に着目した。障害のあるメンバーに楽譜トラブルがあったとき、障害のあるメンバー自身がトラブル認知発話をし、楽譜を要求することでトラブルの処理が達成される。このこと自体がオーケストラの練習という共同行為を達成させるための参加である。ただし、楽譜トラブル処理のために周囲の人による強力な働きかけがなされる場合もあり、オーケストラ活動は参加促進と集団統制的な管理という二面性を有していた。第5章では、先行研究で排除と結びつけて考えられている有標化の場面について着目した。オーケストラのある障害のあるメンバーが特有の言葉遣いをするがあり、そのような言葉遣いは模倣と言う方法で有標化されることがある。分析の結果、有標化は言わば会話を自然なままに進行させる装置であり必ずしも、排除の装置というわけではなかった。しかし、有標化は、メンバーをフルメンバーシップへ方向付けするという働きと障害者カテゴリーへの帰属を潜在的に方向付けする可能性を両義的に含む点を指摘した。第6章では、先行研究で排除と結びつけて考えられる離脱行為への集団的対処について着目した。障害のあるメンバー離脱行為が、演奏活動を妨害するとも解釈されそうな場面における非排除の方法について、オーケストラと即興音楽団体の事例から有能化・無能化という概念を用いて分析・考察を行った。オーケストラでは、周囲の人が妨害的行為を解釈し適切な理由を付与していた。これは障害のあるメンバーの発話を完全化し有能化する実践であったが、その過程において対立・対抗・無能化を含みスムーズなものではなかった。2団体ともに、その場の参加者たちが、離脱行為者を主題化し解釈・理由付けにより適切性を付与し対処しようとしていた。即興音楽団体では音楽合奏という中心的な秩序とは異なる妨害的行為者の秩序を、音楽に関連するものとして正当化し、中心的な秩序に統合しようとするのが行われていた。即興団体では、行為主体性は否定されることもあったが、周囲の人による妨害的行為の記述・意味づけは、阻害的行為者を音楽表現者として有能化しその場の秩序に組み込んでいく実践でもあった。第7章では、多様なメンバーが参加するオーケストラの運営において、曖昧さは合理的な実践であることを指摘した。

以上のように、本論文は音楽団体の事例を通じて障害と社会についての諸相を明らかにした。4つの音楽団体の事例を見ることで、多様な社会参加のあり方、人々の実践を明らかにした。本論文で、重要なのは一つの団体であっても、障害のあるメンバーの様々な参加の次元を有しており、参加を確保する行為には多元的な要素が含まれていたことである。ある団体が、障害者を包摂しているか排除しているかということは一元的には評価しえない。したがって、どのような状況でどのような相互行為のもと参加や排除の現象が現れているかを集団構造の中で地道に明らかにしてゆくことが必要だと考える。こうした構造解明が、社会参加がいかにして実現されるのかについての手がかりを与えるだろう。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (正 井 佐 知)		
	(職)	氏 名
論文審査担当者	主 査	教 授 山中 浩司
	副 査	教 授 川端 亮
	副 査	教 授 村上 靖彦

論文審査の結果の要旨

正井佐知の論文『表現活動における障害と社会—障害者が参加する音楽団体を事例として』は、障害者が参加する表現活動の場において、障害者と他のメンバーとの間にどのような相互作用が発生し、そのことがどのように特定の社会的な場における秩序を維持・形成しているのかを主にエスノメソドロジーの手法を用いて明らかにした意欲的な論考である。著者はまず、障害のある人と表現行為の関係について、これまで障害学、社会学、教育学の領域でどのように扱われてきたかを概観し、特に異化と同化、統合と排除という問題領域を中心として、平等派と差異派に代表されるような主にマクロな社会領域における障害のある人と一般社会の間の位置づけの議論が展開されてきたとする。これに対して本研究では、表現行為に関連するミクロな社会的実践の場において、障害のある人と周囲の人との間でどのような社会的交渉や配慮が生じているのかを明らかにすることで、二項対立的ではない新たな社会的包摂の可能性を見いだそうとするものである。このために著者は、障害のある人が関係する4つの音楽活動（オーケストラ、ロックバンド、和楽器バンド、即興演奏団体）を対象として、運営者の考えや位置づけ、それぞれの活動の現場における障害のある人と周囲の人とのやりとり、さらに団体の運営方法の分析を行いながら、非専門家的方法、差異有標化、有能化、曖昧な組織運営など、いくつかの重要な論点を見いだしている。分析のために著者が用いた方法は、関係者へのインタビュー調査、撮影を用いたビデオ・エスノメソドロジー、団体運営への参与観察である。第1章においては、障害のある人の表現行為の社会的位置づけについて、障害学、社会学、教育学の研究がレビューされ、これらの研究と本論文の関係が論じられている。第2章では、上述の団体のうち三つの団体について、関係者へのインタビューからそれぞれの団体の社会的位置づけや参加メンバーの考え方について考察が行われ、オーケストラやロックバンドといった音楽ジャンルがもつ社会秩序的性格と、平等派、差異派と呼ばれる障害のある人の表現行為の位置づけが必ずしも連動せず、また一般社会においてありがちな明確な団体の目的や戦略といった性質を曖昧にしている側面に注意が払われている。第3章では、オーケストラ、ロックバンド、即興音楽団体の三つの団体における練習風景をビデオ撮影と参与観察を用いて、それぞれの場における音楽評価や障害のある人が関与する攪乱に対してどのようなやりとりが行われるのかを、場の物理的空間、参加者の位置関係、時間的な展開を軸にミクロな分析が行われている。第4章では、長期にわたりビデオ撮影が行われたオーケストラの練習場面の分析から、発達障害が関与すると思われる現場の混乱を中心に、非専門家（医療や福祉に従事しない人々）が行うさまざまな支援・調整活動が考察されている。第5章では、オーケストラの練習場面における特定のメンバーが他のメンバーに対して示す行動的な特徴が、どのように無標化された状態から有標化されるのか、有標化がどのような事態をもたらすのかが分析され、有標化が徴づけられたメンバーの扱いについて両義的な可能性をもつことが示唆される。第6章では、Finlayらがイギリスにおける知的障害者グループホームを分析した際に提起した「無能化(producing incompetence)」という問題を糸口に、これとは逆の「有能化(producing competence)」が集団への参加を促す可能性について、やはりオーケストラの練習場面の分析から考察している。最後に第7章において、著者が運営に携わっている団体の組織運営の方法の分析から、組織運営における「曖昧さ」の効果についての考察が行われている。こうした分析と考察を通して著者は、表現活動における障害のある人とその周囲との実践的関係から、さまざまな非専門家的な方法が発展しうる可能性を示唆しており、障害学、障害の社会学の分野において重要な貢献をなす論文と評価し、博士（人間科学）にふさわしいすぐれた論文と判断する。